

2024 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属： 人文学部

研究(代表)者名： 石田 崇

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日	2025 年 3 月 12 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】(グループ) 産官学連携による観光地の活性化および持続可能性に関する人文学的研究： 広島・宮島地域を対象として				
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担		
	氏 名	学部・職名			
	(研究代表者) 石田 崇	人文学部・准教授	研究総括、英語学研究の視点からの分析		
	(研究分担者) 西光 希翔 三並 康平 (代表者・分担者計 3 名)	人文学部・准教授 帝京大学経済学部・准教授	アメリカ文学研究の視点からの調査・分析 産官学連携研究の視点からの調査・分析		
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 本研究は、外国人観光客の受入体制や観光公害といった地域課題に直面する、特に地方の観光地における活性化と持続可能性を探究することを目的とする。特に、広島県をフィールドとして、産官学連携事業を題材とし、言語学的側面（主に観光地の活性化のあり方についての検討）と文学的側面（主に観光地の持続可能性についての検討）を含む人文学的視点から、地域課題の解決策を考察する。具体的には、「観光地および観光客における言語使用の実態」や「物語による歴史継承の可能性」といったテーマに取り組み、産官学が連携することで、これらの課題をどのように解決できるのかを学術的に問いかける。 上記の学術的問いの解明に向けて、本年度は、広島における歴史・言語景観・文学に関連する文献収集および精査を行いながら、宮島および、他地域との比較のため、東北（秋田・青森・岩手・宮城）や北関東（柏の葉・つくば）といった地域の現地調査を実施したほか、宮島地元商店等との意見交換・交流会も開催するなど、研究知の発信・交流に取り組んだ。現在、2024 年 3 月に本研究成果の一部として刊行した紀要論文（『帝京経済学研究』）の内容を拡張させるべく、本年度の研究活動によって得られた研究知見の整理・取りまとめ作業を行っており、『地域研究』などの査読付き学術誌への投稿を目指している。 また、本研究で得られた知見、特に地域活性化における若者のアントレプレナーシップ育成の重要性を深く掘り下げた学術選書を執筆する計画である。本書では、地域活性化に取り組む大学生の多様な活動事例を詳細に分析することを通して、高齢化が進む日本の地方経済の活性化という文脈において、いくつかの政策的インプリケーションを提示することを目指す。あわせて、本書は学界における専門書との位置づけとあわせ、学生向けの参考図書とする可能性も視野に入れ、本研究から得られた学術的知見を教育現場へ還元することも目指す。特に、本研究で構築した広範なネットワークを活用し、多岐にわたる地域での実践事例を大学横断で収集・分析することで、理論と実践を結びつけた学術的知見を提供する。出版にあたっては、学術選書としての質を担保するため、査読制度のある出版助成制度の活用も視野に入れている。				
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	1. 「銃口の向こうに——マーガレット、ライフル、写真、ヘミングウェイ」 2. 『アメリカ文学史への招待——豊穣なる想像力』 3. 『地域活性化のためのアントレプレナーシップ醸成入門』（仮）			
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考	
	1. 『ヘミングウェイ研究』25 号 2. — 3. —	日本ヘミングウェイ協会 法律文化社 未定	2024 年 6 月 2025 年 3 月予定 2026 年中を予定	pp. 55-66 分担執筆 共編著	
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)					

2024 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 人間環境 学部

研究(代表)者名 : 岡西政典

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2025 年 3 月 12 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】 バケツ一杯の水で環境測定：クモヒトデの仲間に着目した取り組み			
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 岡西政典	人間環境学部・准教授	サンプリング, DNA 解析	
	(代表者・分担者計 1 名)			
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600~800 字程度でお願いします。 近年, バケツ一杯の水に含まれる生物由来の「環境 DNA」(狭義には, 魚類、両生類、鳥類、哺乳類など、微生物ではない目に見えるサイズの生物から環境に放出された生体外の DNA) を解析することで、その場所に生息している生物の種数を把握できる「環境 DNA メタバーコーディング」法に注目が集まっている。日本では魚類や甲殻類、サンゴ類の研究が知られるが、その他の多くの生物に関しては未だ研究が進んでいない状態である。 そこで本研究では, 60 年以上の海洋生物の研究史がある瀬戸内海をフィールドとし, ウニ、ヒトデの仲間のクモヒトデ類に着目した。クモヒトデ類は海底に多量に生息し、その環境を表す「指標生物」になりえる可能性を秘める。 2024 年度には, 2023 年度に引き続き, 1)クモヒトデの DNA が放出されやすい時期の特定を行うとともに, その時期において, 2)瀬戸内海だけでなく太平洋や東シナ海での採水と DNA 解析を行った。まず 1)について, 瀬戸内海中央の竹原と瀬戸内海の入口の鳴門で春夏秋冬の DNA サンプリングを行ったところ, 両海域で夏季 (8 月) に最も検出種数が最大となった。この結果をもとに, 夏季~秋季 (9, 10 月) に, 東シナ海側の長崎, 太平洋側の高知でサンプリングを行った。その結果, 長崎では 1 種, 高知では 2-3 種が検出された。いずれも結果は振るわなかったが, これは 9-10 月にはすでにクモヒトデの活性が低くなっていたことや, サンプリングを行った漁港にクモヒトデ自体が少なかったことが考えられる。最終的な種構成の解析はこれからではあるが, 本研究助成を得て, 少なくとも「年間で最もクモヒトデの活性が高い時期」を特定することができた。今後, 継続して各地でサンプリングを行い, 「バケツ一杯の水をくむだけ」という海底環境モニタリング法の開発に取り組みたい。			
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	An eDNA metabarcoding of brittle stars: examples from the Seto In-land Sea, a semi-closed marine area		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考
	Regional Studies in Marine Science 日本動物学会名古屋大会	Elsevier 社団法人日本動物学会	2024 年 4 月 2025 年 9 月	Vol. 74: 103515
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2024 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 国際コミュニティ学部

研究(代表)者名 : 竹井 光子

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2025 年 2 月 25 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】 国際共修における「やさしい日本語」の可能性と課題			
研究組織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 竹井 光子 (代表者・分担者計 1 名)	国際コミュニティ学部・教授	研究全般の遂行	
今年度の研究成果要旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 本調査研究の目的は、国内学生（日本人学生）と国際学生（外国人留学生）が共に学ぶ国際共修カリキュラムにおける「やさしい日本語」使用の意義と課題を探ることであった。 1 年目の 2023 年度においては、日本語第一言語話者（L1 Japanese speakers）である国内学生にとっての日本語（やさしい日本語）使用の可能性と課題を探ることを目的として実施する半構造化インタビューの設計をおこなった。共通語としての日本語使用を扱う授業担当科目（基礎演習、多文化交流プロジェクト）における実践観察や日本語使用者の省察分析から得られた示唆を土台としつつ検討を重ね、質問項目の整理が完了した。 2 年目の 2024 年度においては、前年度に整理した質問項目による半構造化インタビューを実施とインタビュー内容の質的分析をおこなった。対象としては正課内外の国際交流に積極的に参加してきた 2 名の学生を選択した。分析には Reflexive Thematic Analysis の手法を用いた。この分析結果は、共通語としての「やさしい日本語」使用の意義と課題及び教育的示唆の視点で、国際学会発表及び論文としてまとめた（成果発表②③）。また、関連して、日本語第一言語話者の言語行動（談話分析）とその背後にある意識との関連性について、本研究調査活動を含む 2021 年度以降の研究の総括として論文にまとめることができた（成果発表①）。 計画段階は、国内学生（日本人学生）と国際学生（外国人留学生）の両方の視点からの検証をおこなう予定であったが、本調査研究期間内に国際学生（外国人留学生）を対象とする調査に着手することができなかったため、今後の課題としたい。			
成果発表	発表題目 (学会発表および論文)	① Japanese as a lingua franca in the Japan-US online conversation project: Findings and implications ② ③ Navigating the use of "Plain Japanese" as a glocal lingua franca: Perspectives from Japanese university students		
	発表誌名・学会名		発行所	発表時期
	① 広島修大論集 第 65 巻 第 2 号		広島修道大学	2025 年 2 月
	② 5 th Southeast Asian Conference on Education (SEACE) 2025 ③ 5 th Southeast Asian Conference on Education (SEACE) 2025: Official Conference Proceedings		International Academic Forum (IAFOR) International Academic Forum (IAFOR)	2025 年 2 月 25 日 2025 年 4 月 刊行予定 (3 月末 提出予定)
備考	pp. 19－33 口頭発表 pp. xx－xx			
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ ☒ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2024 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 人文学部

研究(代表)者名 : 阪上 辰也

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2025 年 3 月 12 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】 学習管理システムを用いた大学生による英語の語彙学習状況にかかわる基礎的研究			
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 阪上 辰也	人文学部・准教授	研究の総括（文献調査，データ収集と解析，研究成果の公表）	
	(研究分担者) な し			
(代表者・分担者計 1 名)				
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 2024 年度においては、英語読解に必要な 1200 語の基本単語リストを使用し、学部 1 年生向けの英語科目において、学習管理システムの Moodle を利用した単語の理解度テストを実施し、学習状況と学習成果を調査した。毎週 50 単語を学習範囲とし、半期 15 回の授業のうち 12 回を利用して、600 単語の理解度テストを実施した。この時、学習手段の一つとして、学習範囲内から 20 単語の模擬テストを受験できる練習問題を用意し、この練習問題への取り組み状況（学習状況）と、授業内での理解度テストの結果（学習成果）に関係が見られるのか、具体的には、練習問題に取り組む学習者とそうでない学習者の間に、学習成果の差異がみられるかを検証した。 2024 年度後期に実施した学習記録と理解度テスト（50 問、1 問 1 点）のスコアなどを 100 名分のデータを分析した結果として、練習問題に取り組んでいない学習者（全体の約 6 割）よりも、取り組んでいた学習者（全体の約 4 割）の理解度確認テストにおける平均スコアが約 10 点高かった。なお、練習問題に取り組んでいないことが、事前学習を一切行っていないことを意味するわけではなく、他の手段により学習を行うことで高いスコアを記録する者もあり、練習問題に取り組まない場合の得点分布は広がり、取り組んでいた場合の分布は狭くなっており、練習問題に取り組む行為、また、取り組もうとする学習態度が、結果的に高いスコアの維持に結びついていたものと思われる。教育的示唆として、反復学習が語彙定着に不可欠であり、練習問題の活用がテスト対策として有効であることを学習者自身に認識させることで、語彙知識の定着が促進されると期待される。今後の課題として、練習問題以外の学習方法の詳細な調査や長期的な定着状況の検証が挙げられる。			
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	LMS のログデータを利用した練習問題への取り組みと学習成果の検証（仮題）		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考
	広島修大論集 第 66 巻 1 号	広島修道大学人ひろしま未来協創センター	2025 年 9 月	(ページ数未定)
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2024 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 人間環境学部

研究(代表)者名 : 川村 邦男

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2025 年 3 月 3 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】 高温高压化学反応の研究ツールの構築と人工リボザイムの機能解析			
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 川村 邦男	人間環境学部・教授	研究代表者 (研究ツールの構築および人工リボザイムの機能解析)	
	(研究分担者)	学部・		
(代表者・分担者計 1 名)				
今年度の研究成果要旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 生命は原始地球の超高温高压下の過酷な環境で出現したと考えられている。申請者は、世界に先駆けて超高压下で化学反応を追跡するための装置と方法を開発し、アボカドウィロイド由来リボザイムの高压下での自己開裂特性を高压下 (30 MPa) で解析することに成功した。本研究ではこの手法をベースとして、深海 10000 m に相当する圧力下 (100 MPa) で、なおかつ鉱物存在下での反応を解析する装置 (UltraPress-FR) をつくる。また、これを用いて人工的に配列を改変した種々のリボザイム候補の自己開裂反応を解析する。予備検討の結果、装置作成と並行してリボザイム候補の反応解析を UltraPress-FR の性能評価として行う必要があることが分かった。そこで第 1 に、100 MPa に対応できる高压ポンプ、試料注入器、チューブリアクターを組み込んだ温度可変アルミブロック、6 方バルブ、冷却槽、および圧力調節器からなるフロー系をおおむね組み立てた。今後、継続的に UltraPress-FR の基本性能の評価を行う。第 2 に RNA の 2 次構造解析ツールを使い、79 鎖長のアボカド由来 Ribozyme (ASBVd:HHR) と共通のコア配列をもち、鉱物に吸着するアンカー構造を付与した 45 鎖長の Ribozyme 候補 (ASBVd45) を設計した。これらの Ribozyme 候補が自己開裂反応可能かどうか、速度論的に解析した。この結果、ASBVd45 および、さらにアンカー構造を付与した Ribozyme 候補 (ASBVd45-3G5) は自己開裂能を持つことをほぼ確認できた。さらに、ASBVd45 および ASBVd45-3G5 の自己開裂の温度依存性を 45～65℃の範囲で解析した。以上によって、高压下・鉱物表面上での Ribozyme 候補の反応解析の土台を構築できた。			
成果発表予定	発表論文題目	The reaction behavior of ribozyme-like RNA molecules at high-pressure in the presence of naturally-occurring minerals (構想中)		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備考
	<記入例> 広島修大論集—人文編—第 00 巻 00 号 Life (MDPI), Discover Life (Springer) など	<記入例> 広島修道大学人文学会	年 月	pp.00—00
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2024 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 法 学部
研究(代表)者名 : 前田 星

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間		2024 年 6 月 19 日から 2025 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2025 年 3 月 7 日		
研究課題		【ひろみら特別研究】 近世ドイツ社会における学識：魔女裁判に関する議論を手がかりに				
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担			
	氏 名	学部・職名				
	(研究代表者) 前田 星	法学部・准教授	研究活動全般：前田			
	(研究分担者)	学部・				
(代表者・分担者計 1 名)						
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 本研究は、近世ドイツの法学学位論文・討論録を通じ、大学法学部における魔女裁判に関する議論状況を明らかにし、それによって大学と社会との関係性について考察する基盤を形成することを目的としていた。 本研究では、中央大学・一橋大学に所蔵された 17～18 世紀の魔女裁判に関する学位論文を対象とし、これらに含まれる議論の特徴を分析した。まず、当時の法学者たちは、いわゆる悪魔学の権威とされてきた文献に言及することが少ない。しかし、それらは単に無視されているわけではなく、議論の基盤となっており、いわば「背景化」したと言える。また、彼らが悪魔学に言及する際には、裁判の手続論として議論を展開しているのに対し、悪魔学の実体論的な部分(悪魔がどういう存在か等)については、両論併記をする形で深入りすることを避けていることも明らかになった。従来の研究においてはあまり注目されてこなかったものの、こうした魔女問題に言及した文献が 18 世紀になってもある程度法学部内で生産されていたということは重要である。ここには、魔女をテーマ化したもののみならず、一般的な刑事訴訟の問題を論じる中で魔女についても言及したような文献も含まれる。これらは歴史学や法制史学によって等閑に付されてきたものの、質的に分析される必要がある。それらを分析することで、魔女裁判に関する議論と一般的な刑事法学上の議論との関係性をより浮き彫りにすることができ、魔女裁判という現象を法学者たちがどのように受け止め、既存の知識を駆使しながらそれに対処しようとしたのか、そしてそれがさらにどのような法学的意義を持ったのかを明らかにすることができるだろう。 これらの成果は、2024 年 11 月 16 日第 26 回法文化学会(東洋大学)ならびに同 11 月 30 日関西中世史研究会主催シンポジウム「中・近世ヨーロッパにおける悪魔学作品と社会との相互影響関係に関する学際的研究」(京都大学)での研究報告の形で発表され、また下記の形で活字化される予定である。					
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目		「近世ドイツにおける悪魔学と刑事法学の交錯：17 世紀末～18 世紀初頭の学位論文から」			
	発表誌名 発表学会名		発行所 学会名		発表時期	備 考
	『魔女を糾す 中・近世ドイツの法実践と悪魔学』		森と出版		2025 年 3 月	
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☒ 上記の通り成果発表を 行う (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)						

2024 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 健康科学部

研究(代表)者名 : 木村 安美

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2024 年 6 月 7 日から 2025 年 3 月 31 日までの約 10 か月分		提出年月日 2025 年 3 月 6 日		
研究課題	【ひろみら特別研究】 若年層を対象としたメタボ・ロコモリスク保有者数の低減に関する食事モデルの研究				
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担		
	氏 名	学部・職名			
	(研究代表者) 木村 安美	健康科学部・教授	研究全般の遂行 (立案、調査、解析、まとめ)		
	(研究分担者)				
(代表者・分担者計 1 名)					
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 ロコモティブシンドローム（ロコモ）は、運動器の障害により起立や歩行などの移動機能が低下した状態であり、ロコモが進行すると要介護状態となる。ロコモは高齢者の問題と捉えられがちであるが、実際には若年者にも一定の割合でロコモの兆候がみられると報告されている。さらにロコモは、「メタボリックシンドローム（メタボ）」とも密接に関連しており、早期から両者を視野に入れた予防が必要である。しかしながら、10 代から 20 代の若年者を対象とする研究は不足しており詳細は明らかではない。一方、若年者ではやせ志向によるダイエットや朝食欠食、夜更しなどの不規則な生活習慣による食事の問題点が指摘されており、それらの要因がロコモリスクと関連するとの指摘がある。今年度はロコモに着目し、若年者のロコモリスク保有の実態把握を行い食事性因子との関連について検討を行うことにより、将来のロコモ予防につなげることを目的とした。この目的を果たすため、運動機能分析装置を用いて下肢の運動機能の評価を行った。また、食事評価のツールとして習慣的な食事摂取状況を把握することができる食物摂取頻度調査表（FFQ）、食行動質問票を用いて、食生活状況を把握した。本研究により、若年者においても下肢の運動機能の数値が低い者が一定数存在することがわかった。また、運動機能は体組成や食行動、生活習慣等と関連していることが明らかになった。若年者においてロコモリスク保有の兆候が認められる結果となったことから、今後、運動機能が生活習慣、食事性因子とどのように関連するかについて検討を深める予定である。				
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目		若年者のロコモリスクとその要因の検討		
	発表誌名 発表学会名		発行所 学会名	発表時期	備 考
	日本家政学会中国・四国支部 第 71 回研究発表会		日本家政学会	2025 年 10 月	
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること					
☒ 上記の通り成果発表を ○行う (ひろしま未来協創センター使用欄)					
☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)					

2024 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 国際コミュニティ学部

研究(代表)者名 : 澤 俊晴

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2024 年 6 月 19 日から 2025 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2025 年 3 月 3 日	
研究課題	【ひろみら特別研究】 自然災害予防法制における「指定」権限の分析			
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 澤 俊晴	国際コミュニティ学部・教授	研究の実施および総括	
	(研究分担者)			
	(代表者・分担者計 1 名)			
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 東日本大震災以降も地震災害や土砂災害、洪水災害などの自然災害が毎年のように発生し、貴重な人命が失われている。自然災害予防を目的とする法律は、災害の種別に応じて制定され、それらの個々の法律に基づいて対策が講じられている。しかし、共通して、対策の起点となるのが地域指定である。指定された地域についてのみ対策が講じられる。そのため、必要な地域が過不足なく指定されることが重要となる。 本研究では、砂防法に基づく砂防指定地、急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律に基づく急傾斜地崩壊危険区域、大規模地震対策特別措置法に基づく地震防災対策強化地域、南海トラフ地震に係る地震防災対策の推進に関する特別措置法に基づく地震防災対策推進地域を中心に引き上げ、それぞれの地域指定の根拠規定、指定方法、指定基準、指定手続、運用実態を調査し、問題点を明らかにした。例えば、法が想定する指定権者以外が地域指定の可否を判断している実態や、法に規定する事前手続を没却する運用が明らかとなった。 また、地域指定の判断は、行政庁の裁量行為とされ、通例は、一般処分と解されている。そのため裁量統制が不十分となっているが、個々の地域指定の仕組みと実態を精査することで、根拠法に応じて、規範定立行為や行政処分として整理することが可能ではないか、という見通しを得ることができた。 今後は、河川区域や海岸保全区域、土砂災害警戒区域、宅地造成等公示規制区域など他の地域指定を対象に研究を継続していくこととしている。			
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	地域指定の裁量統制～自然災害予防法制を題材に (仮)		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考
	地方行政実務学会 2025 年全国大会	地方行政実務学会	2025 年 8 月	
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☒ 上記の通り成果発表を <u>行う</u> ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2024 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 商学部

研究(代表)者名 : 厳秀延

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2024 年 11 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2025 年 3 月 12 日	
研究課題	【ひろみら特別研究】 インフルエンサー・マーケティングと政治的消費行動における考察			
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 厳秀延	商学部・助教	調査、及び全文執筆	
	(研究分担者) なし	学部・		
(代表者・分担者計 1 名)				
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 ソーシャルメディアインフルエンサーの影響力は拡大し、企業にとって重要なプロモーションツールとなっている。一方で、インフルエンサーのスキャンダルがブランドに悪影響を及ぼすケースも多い。例えば、脱税、不倫、偽商品の購入といった不祥事が発覚すると、彼らが宣伝する製品やブランドのイメージが損なわれる。本研究は、インフルエンサーの不祥事が購買・不買行動に与える影響、影響を受けやすい消費者の特徴、不買行動を抑制する要因を検討することを目的とした。 本研究では、日韓の消費者を対象にアンケート調査を実施した。ソーシャルメディアインフルエンサーや彼らが宣伝する製品・ブランドを認知している消費者をスクリーニングし、二つのパートに分けて調査を行った。第一に、普段の購買行動やインフルエンサーに対する態度を測定し、第二に、不祥事を想定したシナリオを提示し、購買行動の変化を調査した。 調査の結果、シナリオ導入後、消費者の購買行動には有意な変化が見られた。特に、インフルエンサーと感情的な結びつきが強い消費者ほど、不祥事後に不買行動へ移行しやすかった。一方、認知的な結びつきが強い消費者には有意な影響は見られなかった。また、不祥事に対する「裏切り感」が不買行動を促進する要因となることも確認された。さらに、持続可能なインフルエンサー活動が不買行動を抑制するかどうかを検証したが、有意な影響は示されなかった。 本研究は、企業のインフルエンサー活用における戦略的示唆を提供する。インフルエンサー選定時には、ブランド適合性だけでなく、フォロワーとの関係性の質も考慮すべきである。特に、感情的結びつきが強いフォロワーは不祥事の影響を受けやすいため、リスク管理が不可欠である。また、インフルエンサーの社会的取り組みは不買行動の抑制に有意な影響を与えないことが示された。企業は、倫理的価値や危機管理方針を強化し、不祥事時の迅速な対応策を整備する必要がある。			
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	How do companies respond to advertising failures of social media influencers? Focusing on the sustainable contribution of social media influencers		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考
	<記入例> 広島修大論集—人文編—第 00 巻 00 号 Global Marketing Conference	<記入例> 広島修道大学人文学会 Global Alliance of Marketing & Management Associations	年 月 2025 年 7 月	pp.00—00
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☒ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				